

IV-333

土木史資料の解題記述に関する基礎的研究

小樽商科大学社会情報学科 正 員 今 尚之
北見工業大学土木開発工学科 正 員 中岡 良司
北海道大学工学部土木工学科 正 員 佐藤 馨一

1. はじめに

近年、土木史の研究はますます盛んとなり、土木史の研究者のみならず実務に携わる技術者はもちろん、土木工学を専門としない人などにも土木史研究に高い関心を持つ人が増えてきている。そのことは、土木技術と社会との関りをより良い方向に有らしめるために非常に重要なことと考えられる。

しかし、実際問題として専門分化の著しい土木工学分野においては、専門を異にすれば他の専門分野の文献資料を理解、解釈することは容易ではなく、特に、土木工学を専門としない人々においては、古い資料の探索はもちろん資料の成立のバックボーンを含めた理解は極めて困難なものである。

土木工学がたどってきた歩みを理解し、土木の将来を考えるためにも、また幅広く開かれた土木となるためにも、土木史資料の「解題」が必要である。それらは土木史研究を支えるソフト的なインフラストラクチャーとして考えることができよう。本研究は土木史研究の一分野として、書誌学の手法を導入した土木史資料の目録リスト作成や解題記述について論じ、さらに土木資料アーカイブスの必要性を述べるものである。

2. 土木史資料の性格と書誌学的目録の作成

(1) 土木史資料の範囲と性格

土木史が対象とする資料は、論文や報告書のように製本され刊行された図書資料、工事図面や計算書、実験データ、写真などいわゆる文献と称されているものはもちろん、例えば試験片や試験装置などの実物まで含み、その対象範囲が極めて幅広いという特徴を持つ。それらは土木工学の専門家ではないと、リストや解題の作成が不可能な性格を持っている。

(2) 書誌学と土木史資料目録

書誌学とは「bibliography」の訳語であり、広義には「図書の物的、知的な面に関する研究を包括し、それらの研究は図書の歴史、個々の著作の態様、あるいは他の著作との関係などの理解に寄与する¹⁾」ものとして捉えられている。そして、文献の物理的特徴について研究する分析的書誌学と、内容を対象とし文献リス

トとしての書誌を研究する体系的書誌学の二つに別れている。土木史研究において重きがおかれるのは体系的書誌学にもとづいたリストとしての目録作成となる。また、目録の作成では網羅的な一次的書誌よりも、それぞれの目的のもとに選択的に作成された二次的書誌、特に集合書誌や主題書誌に準ずるリストが種々作成される方が利用者にとって望ましい環境となる。

(3) 土木史資料の書誌的リスト作成の留意点

土木史資料の書誌的リストの作成では、リストを構成する情報の内容の統一に十分気を付けなくてはならない。土木史研究のソフトウェア的インフラストラクチャーであるならば、土木を専門としない人達も利用できるものでなくてはならない。このため、国際的な標準規格に従ったリスト作りを行い、データベース化することが必要である。特に、土木史資料は図書に限らず、実験データや図面なども包含し、さらには実物資料をも含む。このためアーカイブス組織で用いられる国際的な規格のISAD(G)²⁾に基づいた形で、リストに掲載する情報を統一すべきである。

3. 土木史研究の一分野としての資料の解題

(1) 土木史資料の解題の必要性

資料はその専門分野または文献が書かれた時代背景に精通している人のみが生かされるものとは限らない。特に土木史資料は対象が幅広く、かつ専門的な内容を持っている。そして、実験データはもちろん、報告書であってもその内容を理解するためには専門知識が要求される。したがって、資料の書誌目録が作成されたとしても、そこに記載された資料の詳細や内容、特に資料が成立したバックボーンを理解は困難である。

資料は貴重な記録情報源であり、様々な分野の人々によって、必要に応じて活用されることが望ましい。そのためには、資料の解題記述が必要不可欠である。また、解題記述が土木史研究の一分野として位置付けられるべきである。

(2) 土木史資料における解題

一般に、解題は資料の形態的な記述を行なう部分と内容的な記述を行なう部分から構成される。

書誌学における解題は「図書の書誌学的註記を解題と言う。すなわち著者、書名、巻頁事項、出版事項等及び由来、並びにその他図書に関する形態的若くは内容を説明せるものを言う³⁾」と定義されており、形態的な記述が主とされることが多い。

しかし、土木史資料の解題記述では、対象となる資料の性格や解題記述の目的から、主題・内容の説明や評価を行なうことが重要視される。このため、解題の対象となった資料について、

- ① 資料が書かれた（作られた）社会的背景の説明、
- ② 資料の著者等の略歴、③ 著者等の学術観や技術観、④ 著者等の系譜、⑤ 資料の学術的、技術的ポテンシャルの説明がその要素となる。

（3） 解題の対象となる土木史資料

解題の対象となる土木史資料と解題記述の要素について図1に示す。土木史資料の解題記述では、著書や論文はもとより、実験や統計の記録、設計図面、さらには試験片や各種装置などもその対象となる。

4. 解題作成と土木資料アーカイブス

設計図面や発注書、計算書、工事写真などの記録類は、解題の記述に不可欠な一次資料であり、なおかつそれら自身が解題記述の対象である。それらの資料は事業が終わると関係機関によって保存されることが多い。しかし、その保存基準については統一が図られていない。さらに、行政担当者、特に土木担当者に資料を保存する必要性の認識が欠如し、保存手順の未確立、保管スペースの狭小などから、安易な廃棄がなされ、結果として資料探索にエネルギーが費やされる現状が存在する。

現在、日本においても欧米等に見られるアーカイブスの考え方を取り入れた文書館が組織され、行政資料の保存がなされるようになってきた。土木においても関連する資料を収集、保存するアーカイブスの設置とその運用についての理解が望まれる。

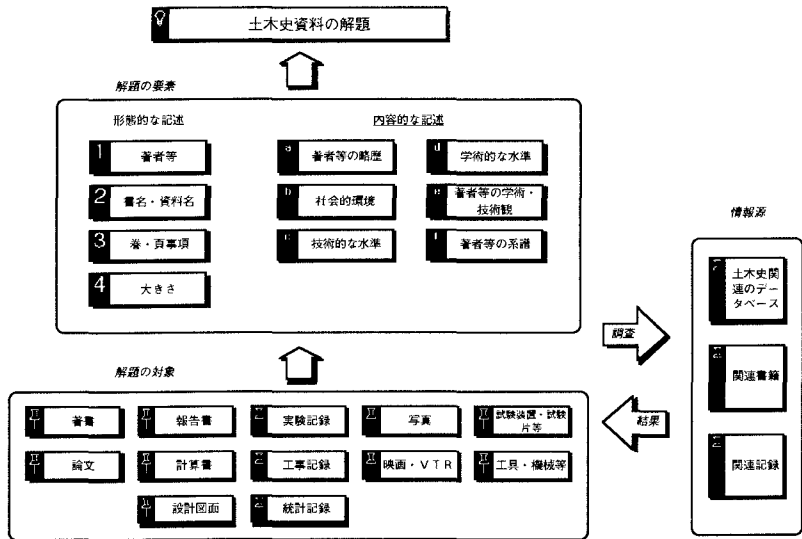


図1 土木史資料の解題記述の対象と要素

5. まとめ

現在、土木学会の土木史研究委員会内に設置された「廣井勇博士文献資料調査小委員会」では、廣井勇博士という主題によって書誌目録が作成されている。さらに、博士が著わした著書や論文はもとより学生時代のノートや教授時代の講義録など、博士の学術的な足跡にかかわる文献資料の収集と主要な資料に対する解題記述が取り組まれている。また、主題である廣井博士の理解を深めるために、博士の動向を記述した新聞記事の収集とそれによる作業用略年表などが作成されている。これらによって廣井博士が経験してきたことや人間像の理解が進み、かつ明治から昭和初期にかけての日本の土木技術を理解するために必要な、貴重な記録情報源を有効に活用する手だてが提供されよう。

今後、土木史研究において、資料の書誌目録的リストの作成や解題の記述、さらには、実際の構造物などの解題的な記述の実施が、積極的に取り組まれるべき分野の一つといえよう。

<参考文献>

- 1) 日本索引家協会：『書誌作成マニュアルー文献目録をつくるひとのためにー』，p.3，日外アソシエーツ株式会社，1980年
- 2) 青山英幸，森本祥子：『国際標準記録史料記述：一般原則』，記録と史料No.6，pp.106～117，全国歴史資料保存利用機関連絡協議会，1995年
- 3) 植村長三郎：『書誌学辞典』，p.70，教育図書株式会社，1942年